

眞実は遙か遠く (前編…春夏秋冬の旅)

プロローグ 春風のような

気儘な日々ではあるが、自由とまでは言えないような。羈束だとは思わないが、規則的と言える程の。

高校生とも、社会人とも全く違う、人生で見れば特異な時間。倏倏とした時間であるが故に、何か特別を見出そうとする。それらは、どう在るべきかは人それぞれだが、どうも、使い方がよろしくないように思えて仕方ない。自覚がないと言うか。

いや、今は全くの他人の話は要らないな。自分自身の在り方とは高尚過ぎるが。

俺の話しよう。勿体ないと言えばかりやすい。消費の在り方を間違えているようで、浪費しているようで、どうも心が覚束無い。

最良の選択であると言い切れるわけでもないし、後悔が無いとも言えない。けれど、それは疾うに過ぎた話だ。問題は今にある。

俺は、俺自身に足を引つ張られているのではないか。

狐疑の夢とでも言うべき俺自身に、俺は桎梏されているのではないか。そんな思いが纏わり付くのだ。

大学の教室で、そんなことを、目の前に座る藍咲知妃紹に話した。

暫くの沈黙の後、藍咲はルーズリーフの端に。ペンを走らせる。俺は黙したままそれを見る。

笹棒とはこう書くらしいよ、と、示すソレは何かの暗喩か？

そう問うと、藍咲は一つ唸って答える。

「シミリとも言えないか。うん、ごめん、見たまんま」

とてもごめんとは思っていないような表情だが、謝られるようなことではない。別に怒っちゃいない。寧ろ内心少し感謝している。

狐疑の夢は、河清であるとはいえ、せめて針小棒大……じゃなくて、棒ほど願って針ほど叶うくらいはして欲しいと思っていた。だが、狐疑は狐疑であり、河清は河清である。

叶わぬ願いに疑いの心。焦りもあつたのかもしれない。話題を逸らしてくれた藍咲に、心の中で礼をする。

改めて息をつき、大袈裟に、軽く頭を振る。

言いたかったことはそうじゃない。驕足であると思う。そう言いたかった。

「俺も悪かった、話を戻そう。お前のことだ。藍咲」

「なんの話だっけ」

恍惚でペンを口に当てる。

藍咲知妃紹、俺と同じ経済学部の上に同じ経済学科の一回生。尤も、経済学部には経済学科しかないが。

表現としては可笑しいが、透き通るような濡烏の髪に、壁の先をも見透かしてしまいそうなガラス玉の如き瞳、一七〇センチはありそうな背丈と、線は細いが力強さを内包しているような体躯。表情は多彩だが、伶俐さが香り、いつもその奥は読み取れない。

「どうしてこの大学に来たんだ、って話だ」

俺は背もたれに身体を預け、少し意気込んで藍咲の瞳子を把握に向かう。まともに切り返されれば負けるのは必至だが、物は試しに挑んでみる。

だが、藍咲は取り合おうとはしない。

「そうだっけ。まあ、別にいいじゃん？ あんまり気にするようなことじゃないって」

楚々とした見て呉れだが、言葉遣いは高校上がりらしい雑なものだ。しかし、その口調の裏には、計り知れぬ藍咲の胸中が潜んでいる。と、勝手に思っている。

そんなことを考える俺を他所に、藍咲が切り込んでくる。

「それに、もっと気にするべきことがあるじゃない」

そうだ。俺は頷く。そして付け加える。

「なら、これが解決したら教えてくれ」

「気が向いたらね」

変わらず藍咲はするりと躲していく。追及は控える。

俺も藍咲も両者とも、現状の打破に採択はなされた。気を取り直して、周囲を見渡す。

五号館五階の五五二教室。人を敷き詰めれば三百二十人が座れるだっ広い教室。そこには今、俺たち二人しか居ない。

座席は横に三席、三席、四席、三席、三席ずつの束で置かれ、縦に二十列であり、左からそれぞれの端の席に「Aから」までの番号が振られている。

「17と」16に座り、静閑な教室を眺めるのは、現状を思うとどこか後ろめたさが芽生えてくる。

「一つずつ、整理した方がいいか」

「かもね」

鼻を鳴らし、藍咲は手振りも加える。

「まずは、どうしてこうなったか、だ」

「いきなり核心だ」

そう、核心だ。核心こそが、俺が藍咲に問うた理由だ。

羈束も規則も、ただ驥足から逸れた路傍の解釈だ。端緒はやはりそこにある。記憶を辿れ

ば、藍咲に誘導された故の逸脱であったような気はするが、今はいい。

俺の問いに藍咲は答えない。答えようとしな。ならば、少しだけ、出来る範囲の手法を使って、こいつから聞き出してやるのも一興だろう。時間をかける、小狡いやり口でも、きつと仏さんは許してくれる。

「藍咲、改めて、ここまでの経緯を振り返ってみよう」

閑散とした箱庭の空気も、藍咲が居れば閑雅に思える。しかし、それはきつと紛い物であろうということ、既に察しは付いている。

「そうだね。じゃあ、始まりは、新入生ガイダンスの日にしようか」

藍咲は、対角線上にある窓を燭視して、続ける。

「あの日は、そう。まるで、春風のような」

俺も同じ先を冽視する。

ああ、まさしく、問題は今にある。

「……大袈裟だ」

だがそれは、“春風のような”と称されて余りある、風雅なものではないと、確信を持つてそう言える。

第一章 亡霊を見た

全十三号館と、体育館やグラウンド等のスポーツ施設からなる摂南大学寝屋川キャンパスは、法学部、国際学部、経済学部、経営学部、理工学部、現代社会学部の六学部と十一学科からなる総合大学である。

キャンパスはもう一つ枚方市にあり、薬学部、看護学部、農学部の三学部六学科、つまり全体で九学部十七学科を擁^{よう}している。俺が通うのは本館である寝屋川キャンパスなので、分館である枚方キャンパスのことはよく知らない。

学部は不足しているとも充足しているとも言えず、それが悪いこととは思わない。むしろ、施設数や交通の便から見ても丁度いいと言える。

大学は『現場で活躍している教員が、現場の最先端の理論・技術をまるで現場にいるように教授する』という精神を最も誇りにしているらしい。まだ講義は始まっていないので、実際はどうなのかまだ分からない。

『本学では、「建学の精神」に依拠した「教育の理念」と、それを具体化させるための「方針・方法」を次のとおり定めています。』と記されているが、続きは目が滑って俺には読めない。読む気が無いだけと言われたら頷くしかないが。

ページを捲^{めく}ると、校章の次にシンボルマークが掲載されていた。説明によると、どうやら人という漢字をシンボライズしたらしい。ブーメランじゃなかったのか。

別の資料を覗くと、履修に関する情報が載っていた。俺たち新入生にとって、何よりも大事な事柄^{ことば}だろう。何を取るべきで、何を取らないべきか。興味をそそる講義は目につかない。

卒業に必要な単位数だったり、必修科目だったり、コース選択だったり、ゼミだったり、大学とは思ったより自由でもないのかもしれない。まあそれは、俺が適当な心持ちのまま進学を決めたからだろうが。

「ねえねえ！」

しかし進んでしまったものは仕方ない。入学金も授業料も既に親に出世払いしてもらったし、後には引けない。

また、ページの後ろには、その他大学のイベントなどが纏^{まと}められていた。

四月『春風祭』。これは新入生歓迎祭であり、今日も、ドローンが飛んでいたり、ドローン部の垂れ幕が靡^{なび}いていたり、ラグビーのユニフォームを着ている人が居たり、リフティン^{リフティン}グしている人が居たり、道着で組み合っている人が居たり、シュートを放つ人も居たりした。俺も幾^{いく}つかクラブに誘われたが、どれも取り合わなかった。七月『七夕祭』、八月『夏期休暇』、九月『オータムフェスタ』、十一月には大きく『摂大祭』の見出しがあり、特に

気合いが入っているようだ。参加しようと思うほど積極的ではない。十二月『クリスマスフェスタ』『冬期休暇』にうんぬんかんぬん。

「ねーえ！」

暇つぶしに、ここ八号館についても調べてみる。

『実験や研究を中心に学ぶ理工学部^①の学生に必要な施設がそろっている8号館。1階に「テクノセンター」、2階には「製図室」と「物理実験室」、3階には、建築学科の「教員研究室」「ゼミ室」と、実験や研究に必要な設備を添えた施設があります。4階には最大300人収容可能な教室があります。』

『実験や実習、卒業研究における機器製作などに利用する「仕上加工実習室」「汎用機械実習室」「ろ機械実習室」「溶接実習室」「塑性加工実習室」の5室で構成されているのが理工学部テクノセンター。企業の工場と同様の機器・設備を使った機器制作を通して「ものづくり」の基礎的な方法や考え方への理解を深めることができます。』

授業以外の時間帯は学生たちに実習室を解放し、設備も利用可能。身近に「ものづくり」に触れられる機会を広げています。』

など、経済学部^②の俺には関係のなさそうな情報が並んでいた。早々に読み飛ばす。

更に部活紹介も載ってあった。ラグビーが盛んであるらしいということは聞いていたが、それ以外の事情は知らなかった。意外と種類は多いらしい。ドローンサッカー部なんてもあり、後者は四年制大学でここにしかないと書いてある。しかしこの様子じゃあ、存在すら知らずに卒業していく人も多いことだろう。

見逃していたが、端に小さく『撰大文化大賞』との記載があった。図書館を中心に、どうやら八月下旬から十二月に掛けて開催されているらしい。『撰大祭』に比べ随分肅然^{しよくぜん}としている。これじゃあ、

「ねえ！」

「ん？」

考えていると、前の席から声がかかった。退屈で草臥^{くたび}れそうだった新入生ガイダンスは既に終了し、個々人桎梏^{しつこく}から放たれていた。

「こんにちは！ 君の名前は？」

どこか作り物めいた笑顔でそう問うたのは、凜々しさと愛らしさを共存させる長い黒髪の女性。

脳裏まで読み取られそうな茶色の瞳を暫し見つめて、逸らしてから答える。

「稗旗狐太郎だ」
ひえはたこたろう

「稗旗狐太郎田、ね。私は——」
ひえはたこたろうだ

「違う。稗旗狐太郎、だ」

「ああ、狐太郎ね。私は藍咲知妃紹、よろしく」
あいざきちひろ

にこやかにそう言われるが、素直に言葉を返せない。名を告げたのも失敗だったか。

しかし俺の返事の有無は気に留めず、藍咲と名乗った女性は続ける。

「狐太郎、ちよつとさ、私の話聞いてくれない？」

中々度胸のある距離の詰め方をするやつだ。俺が取り入り易いと思われているだけかもしれない。

「話か、なんで俺に」

「これを相談出来る友達なんて、狐太郎しか居ないんだもん」

こいつは何を言っているんだ。

「今名前を知ったばかりだろう」

「じゃあ友達だ。というわけで、ついさっきの話なんだけど」

藍咲は無理矢理にでも話を進めたいらしい。このまま押し問答を続けても、帰してはくれない。なそうな雰囲気をする。諦めて聞くしかないようだ。無視して立ち去るには長居し過ぎた。

「私ね、ガイダンス中に、亡霊を見たの」

いや、まだ間に合いそうだ。

「真面目に聞こうとした俺が馬鹿だった」

「ちよ、ストップストップ！ 私だつてまじめだよー！」

藍咲は立ち上がった俺の腕を掴む。

「ほんとに見たんだ、あれは亡霊だよ……！」

必死な顔で訴えかけてくる。しかし演技ということは分かっている。

俺は面倒臭さをわざと滲ませ席に座る。

「それで？ 亡霊を見たつてだけで終わりじゃあないんだろうな」

藍咲はわざとらしく明るくなって、大きく頷いた。

「もちろん！ 私は亡霊なんて信じていないからね」

「つまり？」

俺が聞くと、何故か周りに聞かれないように警戒し、意味は無いと思うが、声を潜めて藍咲が言った。

「亡霊の正体が知りたいんだ」

まあ、そんなことだろうと思った。

藍咲は詳細を語り始めた。

私、苗字が藍咲でしょ？ だから、席は一番前。小学校も中学校も、高校も一番前で、大学ではどうかなって思ったんだけど、やっぱり一番前だったの。身長順では一番後ろだったけど、番号順で並ぶことも多々あったから、つまり、運動量が多かったわけだ。けどね、知り合いの先輩には私より前に来る人がいて、私の憧れというか、尊敬してるといとか、凄く

かつこいい先輩なんだ。名前は……ああごめんごめん、どっか行かないで！ 関係ない話して悪かったって。

それで、この教室の一番前……ほらあそこ、左端の、そうそうそこ。あそこが私が座つた席で、横が窓だから、私ずっと窓のほうを見てたの。正確に言うと、真横はでかい柱があるから、左斜め前の窓を見てたの。ガイダンスって面白くなかったし。いや、狐太郎だつて、冊子に集中して話なんて聞いてなかったでしょ。話しかけてもぜんぜん反応無かつたし。……え、最初のほうはずっと寝てたの？ 前半は寝てて話を聞いてなくて、後半は冊子に夢中で話を聞いてなかったって？ それは流石に、私でもやらないよ。

分かつたよ、続きね。途中、確か二十分くらいが経つたとき、学生が入ってきたでしょ？ 女の子で……ああ、寝てたのね。そっか。えっと、扉を開ける音はけっこう大きくてね、皆その学生に目を向けたの。教員も、気にしていない風で、説明しながらも横目で見てた。私もほぼ無意識で外を眺めてたから、けっこうびっくりして女の子のほうを見た。

その時にね、窓から人の気配を感じたの。視界の端っこのほうにね。で、反射的に顔を向けたら……なんと！ 窓にべつたりと人が張り付いてたの！ しかも声も聞こえたんだ！ なんて言つたのか分からなかったけど、怨霊の唸り声みたいにガラガラでボソボソした声だった！ 私慌てて、皆のほうを見たんだけど、私以外にそれを見た人は居なかったみたい。もう一度振り返って見た時には、消えちゃってたんだ。……見間違いじゃないよ！

藍咲は、中々愉快なやつらしい。適当に零こぼしたことも全部拾って返してきた。

「とりあえず、見たことは本当だと仮定しよう。じゃないと進まないからな」

「もちろん」

俺はその時寝ていたらしい。起きていれば、面白いものを見ていたかもしれない。今更だが。

「ここは四階。本物の人間というのはまず無い」

ガイダンスの教室は八四二教室。つまり八号館四階の第二教室である。この階には教室は二つあり、法則に従いもう一つは八四一教室である。来る時にちらりと見たが、ここよりも一回り小さいようだった。中に数人の学生が居たが、窓から軽く身を乗り出して黄昏たそがれている様子だった。

思い当たる事として、今年からクライミングウォールが建てられたらしいが、それを持つてくることは現実的ではないし、クライミングの心得こころえのある者が四階まで登攀とうはんしてきたとも思えない。掴みどころのない壁だし、そうするだけの理由も見当たらない。

「つまり」

「つまり？」

「つまり、お手上げだ。見当もつかん」

「早いよ！」

「だって、難しい」

「こうしてくれようか！」

「悪かった！ 真面目にやるからっ！」

なんて乱暴な奴なんだ。頬を引っ張られた。

ヒリヒリする頬を擦りながら、改めて考える。しかし、ヒリヒリするせいかもしれない

が、やはり考えるには材料が少なすぎる。

「ヒリヒリするが、まずは、調査から始めよう」

「ヒリヒリヒリヒリうるさいよ」

「一回しか言ってない」

人の心の中は読むものじゃないぞ、全く。

気を取り直そうとしたところで、藍咲が言う。

「どこからにしようか」

「そりゃあ、現場だろう。安楽椅子探偵なんて試みても、解けずに安楽死するだけだ」

「物騒な」

「安楽なのに」

藍咲に颯めっ面をされた。

つまらない小ボケはやめることにしよう。安楽椅子と安楽死はなんの関係もないし。

ひとまず、亡霊が現れたという窓に移動することにした。

「この窓でいいんだな？」

「うん。怖いなあ」

感情が籠っていない。

嘆くふりをする藍咲を無視して、窓に近づく。

縦に二枚、横は柱を除き全面に。

反対側にドアがあり、藍咲によると、そこから学生が入ってきた。同時刻、亡霊が現れた。角度的には、確かに全員が学生に注目すれば、亡霊は誰にも見られないままだったろう。

「亡霊の出現に学生が合わさったのか、学生に合わさって亡霊が出現したのか。どちらにせ

よ、良いタイミングで現れたもんだな」

「私も同感かな」

窓はもちろん開けられる。カラカラと小気味いい音を聞いてから、下を覗いてみる。

真下の地上は庇に遮られ、様子は窺えない。どちらにせよ階下に降りる予定だったので、特に支障はないが。

庇に何かが落ちているようでもないし、もちろん亡霊が漂っているということもない。このまま首を巡らせても埒が明かなそうだし、下階に降りることにした。

窓辺にいた学生は、既に居なくなっていた。

亡霊は、その姿を見られたかったのだろうか。見られなかったのだろうか。

出現場所は教室の端、一瞬の内に居なくなったようで、そう考えれば見られなかったと言えるが、それなら初めから姿を見せなければよかっただけの話。

どういう意図で亡霊が現れたのか、そこすら検討が付いていない。理由など後回し、でも良いのだが。

また、声というのも厄介だ。怨霊の唸り声とは、そう簡単に聞けるものじゃない。風が吹いて木々がざわめいた、と言っても納得してくれるかどうか。藍咲の中では怨霊の唸り声として根付いているだろうから、生半可な音では理解は示してくれないだろうな。全く。無視すれば良かった。

「ここが真下か……ん？ おい、何をやってるんだ」

「オブザーベーション」

「帰る」

もうしないからと泣き付かれた。

次は無いと言っておいた。

「床には何も落ちていないな」

上からでは見えなかった、庇陰を覗いてみるが、理工学部らしい電動ノコギリやチェーンソーや発電機が置いてあるだけで、めぼしいものは無さそうだ。

さっき読んだ資料によると、八号館の一階はテクノセンターとなっており、外からでは上手く様子は窺えないが、人が居るのは確認できた。考えに詰まれば聞き込みするのもやむを得ない。面倒だから出来ればやりたくないが。

だからこそ、手間をかけず解決するには、今は藍咲だけが頼りになる。情報は全て引き出しておかなければ。

「藍咲、見たことは全部話したか」

「ん、どうしたの」

「お前が見たことは全て話してくれたか？ 何か言い忘れているような事とか」

「ああ、考えに詰まったのね」

「ただの確認だ」

酷い言い草だ。詰まるための前提条件すら、まだ満たしていない可能性があるのだ。それを満たすための確認だというのに。

藍咲が床を見つめて考え込む。

「えっと、そうだなあ」

再生と巻き戻し、ズームや早送りで手掛かりを探してくれていることだろう。うんうんと唸りながら眉間に皺を寄せている。

その様子を見て、意識せず零した俺の声。

「……いや、唸り声もあったか。何か他に聞いたとか」

その呟きを聞いてから、意表を突かれたように、藍咲は緩徐に目を見開いた。

「……そうだ、私、振り返ったの」

視線は固定されたまま、藍咲もまた無意識か、小さな声でそう言った。
聞き取れた俺は、今更何をとばかりに返す。

「それは聞いた。気配がしたとか」

藍咲自身が言ったことだ。しかし藍咲は頭を振った。

「違くて……気配もあるんだけど。けど、音がしたの」

そして、亡霊の謎は次の段階へ進む。

「音？」

「うん、機械音がね。それもあつて振り返ったの」

機械音だと？ 亡霊っていうのは機械なのか。

「その音は、どんな」

「どんなって言われても……こう、“電気で動いています！” って感じの……」

「全部そうだろう」

「そうなの？」

「そうだろ、多分」

「……」

「もっと具体的に言えないのか」

「具体的でしょ、電気って」

「そういう意味じゃない」

藍咲め、嫌な相手だ。

ため息をついて、少し歩く。

藍咲が聞いた機械音が電動ノコギリやセンサーなどの音だとしても、それで一体どう亡霊に繋がるのか。亡霊が電動ノコギリを持って命を狙ってきたのだろうか。

脳が唸る。

別に真相を暴かなくとも、藍咲が納得する答えが用意できるなら、俺はそれでも構わないのだが。余計難しくなってしまうては元も子もない。どちらが早く終わるだろうか。

謎を解くより、楽な選択肢を求めて歩き回っていたところ、

「……ん」

どこからか、音が鳴り出した。場所は……テクノセンターだ。作業をしている人が見とれる。藍咲はベンチに座って携帯を弄っている。

聞こえてくるのは、機械音だ。……しかしこれは。

ふと、一つ疑問が浮かぶ。機械音とは、何をもって機械音と判断するのか。電動ノコギリやチェンソーなどの音は、機械音と表現するだろうか。一般的には……エンジン音？

まあ、ただのイメージの話だ。

だが、今聞こえるこの音は、間違いなく機械音だ。重々しく、いかにも重機といったような音で、これを聞いたのなら機械音として立派なものだが、センター内の機械が亡霊に関係してくるだろうか。

「……はあ」

推理なんて、慣れないことはするものじゃない。頭の中で無数の情報が行き交うし、無限の派生が邪魔をする。考えがあちこちに飛び回って、何も纏まらない。

俺の成すべきことは、亡霊の正体を知ることだ。だが、それが正解である必要はないと思っている。藍咲が、“それが正体だ間違いない！”と疑わなければいいのだ。ただ、問題は、正体を暴くのと、正体を創ること、どちらが楽なのかということだ。現時点で、そもそもどちらも望めないのが痛いところだが。

——今一度、どちらの足掛かりにでもなるように、藍咲からの情報を整理してみる。

ガイダンス中、学生が一人、遅れて入室する。俺を除き、藍咲を含む学生、教員がそちらを見る。

同時刻、機械音と共に、学生が入ってきたドアと真反対の窓に亡霊が現れる。藍咲はその音と気配を以て振り返った。唸り声も聞こえたらしい。

亡霊に驚き、周りに目を回すが、誰もそれを見ていない。俺は寝ていた。再度、窓を確認するも、その時既に亡霊は姿を消していた。

ざっくりと、こんなものか。

亡霊は実在しないものとして——亡霊に対し実在という表現を使うややこしさは置いておいて——その正体を知るために重要そうな事柄と言えば、“機械音”と“唸り声”くらいなものだ。

だから、手始めに、分かりやすい痕跡がないか調べるところから進めてみた。だが、教室から見ると、それらしいものは残っておらず、次は外に出ることになった。庇で遮られた場所に何かあるかもしれないと思ったのと、八号館の外観から得るものがあるかもしれないと思ったからだ。

そして見つけたものは、電動ノコギリとチェンソーと発電機。そして耳にした機械音らしい機械音。

どれも亡霊の正体を暴くものではなさそうだ。せめて、手掛かりの一つでも見つければ、解決出来そうなもののなのに。

テクノセンサーからの機械音を背景音楽にして、もう少し歩いてみる。

八号館の前は、幾つか木々が植えられており、高木と低木によって通路が形作られていた。

道なりに歩を進め、一つ垣根かきねを越えて。

……そこで、俺は——俺が見ることは無いと思っていたもの。こんな面倒事に巻き込んだその根本。

正に”亡霊“を、目の当たりにしてしまった。

地面に這うように、人型の黒い影が目の前で揺れている。太陽は背中から当たり、俺の影も伸びている。しかし、明らかに、この亡霊に持ち主は見当たらない。影のみが、独りでに揺れている。藍咲に見せてやれば、考えを変えるかもしれない。

しかし、それでも、亡霊なんてものは存在しない。俺は後ろを振り返り、高く聳える名も

知らぬ木本の頭に視線を遣る。

そこに引つかかるのは、萎れた、人型の……風船か？

その姿を認めた後、小さく、安堵を込めてため息を吐いた。

俺は藍咲を呼んだ。

「うわお、こりやすこい」

風と共に揺らめく影に、藍咲は感嘆を漏らす。

縦から横から見て回る藍咲の動きが、ある程度治まるのを待つて、俺は口を開く。

「こいつが、亡霊の正体だ」

俺が思うに、と付け加えるまでもないか。

藍咲は座り込んで影を凝視する。

「この影を見たってこと？」

「いや、正確にはあっち。本体のほうだ」

木に引つかかる影の持ち主を指差す。

藍咲も座ったまま其方を見る。

「亡霊に本体って、あんまり聞きたくないね」

「信じてないんじゃないか？」

「そうだけでもさ」

複雑そうな表情を見せたあと、一転して、戯れた顔で言ってきた。

「じゃあ、推理を聞かせてくれる？」

「……ああ」

推理と言えるほど高尚なものではないのだが。

「あそこに居る人型のバルーンを、こいつで膨らませたんだ」

藍咲を呼びに行くついでに、発電機を持ってきておいた。使ったことがないので手惑てまどい一つも、どうにか稼働させる。

機械音と言えなくもない。謎の一つはクリアされた。

藍咲が何も言わないところに不安を覚えるが、構わず続けるしかない。

「この発電機で空気を入れていたが、不手際で外れて、空へ飛んで行った。お前が見たのはそれだろう」

そろそろ、何かしらの反応が欲しい。返答を待つ間、暫し沈黙が流れる。

十数秒経ち、藍咲が口を開き始めた。

「亡霊は窓にゼロ距離だったけど、庇があるよ？」

初めに聞くところがそこか。

だがその問といなら問題ない。

「風船なら、どんな軌道でも文句は言えまい」

物理は基礎止まりの俺たちからすれば、風船の軌道など不規則で予測できないもの。乱数のようなものだ、どんな動きでも有りうるものなのだ。

藍咲も不本意そうにしながら納得した様子。問いは続く。

「唸り声は？」

「空気の抜けた音だろう」

これで謎の二つ目はクリアされた。

風船から空気が抜ける音というのは、窓越しになら唸り声に聞こえてもおかしくない。

「ふーん」

藍咲はどこか飲み込めない様子だが、具体的な反論が出せない上、人型のバルーンと発電機という物的証拠まで存在する以上、納得するしかないのだ。いくら不服な答えだろうが、全ての状況と一致するなら、それが真実なのだ。確かシャーロック・ホームズもそう言っている。

しかし、藍咲につつかれるのが少し怖いため、これを真相としてさっさと締めに入ろう。

「犯人は逃げ出したか、取ってくれる事務員でも探しに行ったか。後者なら、いずれここへ帰ってくる。前者なら、もう仕方ないさ」

俺は、どちらでもいい。もう過ぎた話となった。

「そうだね。発電機で、風船に空気、かあ」

藍咲は立ち上がり、木の上で草臥れる亡霊の実体を眺め、名残惜しそうにそう言った。

風はまだ肌寒い。しかし爽やかなものである。

推理の披露や藍咲の様相に気を取られ、発電機を止めるのを忘れていた。

今度は俺が座り込む。

電源を切ろうと、手を伸ばしたところ、やはり、藍咲は口を挟んだ。このまま見逃してくれる気は、全く以て無かったようだった。

「ま、発電機じゃ使い物にならないけどね」

「え？」

伸ばした手が止まる。孤独に音をかき鳴らす発電機に、どこか友愛^{ゆうあい}を覚え、同調したような気分になる。

しかし更に、藍咲の戯^{おど}けた調子は確度を増して、俺の足を引つ張った。

「あと、この音じゃないよ」

「は？」

「私が聞いたの、これじゃない」

今言うなよ。

電源を入れた時、既に違うと分かっていたんじゃないか。なぜその時点で言わなかったんだ。……言いそうな奴ではなさそうだが。

だが、しかし、発電機の音じゃない。なら、

「それと——」

「こっちつす！」

藍咲が付け加えようとしたと同時に、軽快だが深刻そうな声が背中から響いた。

余りに領域外から貫いてきた声だったため、反射的に声の主に顔を向けた。それは、髪を金色に染め上げた男子学生。

作業服をきた中年男性を引き連れて、俺達のことは一瞥^{いちべつ}した。

「すみません、あれつす、木に引つかかってるやつ」

「ああ、結構高いところにあるなあ。道具持ってくるから、待つとけ」

「すみません、助かります」

ぺこぺこ頭を下げて、事務員——恐らくは——が小走りで駆けた背中を見送り、学生は大きく息を吐いた。

俺は跳ねるように立ち、思わず男子学生に声を掛けた。

焦燥に駆られた、ような気がする。

「あの、あれって」

訥々^{とつとつ}と、上手く出ない声で、指差しを加え伝える。

「ああ、あれな、風で飛んで行っちゃったんだよ。ここの屋上で実験しようとしたんだけど」

「実験？」

「おう、風船使つてな。もちろん許可は取ってるぜ」

安堵のためか、口調は明るい。

反対に、俺の調子は沈んで行く。

「風船は、使う前に飛んで行った」

「そうだぜ、焦ったわ、まじで」

「発電機も、電源を入れる前」

「ん？ まあ、そういうことだわな」

……つまり、何の関係もないのか？

「空気を入れていないから、音が鳴ることもなかった」

「おと？ まあ、そうだな。音なんて何も鳴ってないぜ」

「……ここまで状況が揃っておいて、何の関係もなかったのか？」

「……」

黙り込んだ俺に首を傾げつつ、学生は言った。

「だけど、一つ言っておくぞ」

今度はなんだ。もう驚くことはないぞ。

「空気入れんのは、コンプレッサーだぜ」

さいですか。

どうも親切に、親指を立ててくれた。

藍咲も頷いている。言いかけたことはこれらしい。

亡霊未遂を掛けた風船は回収され、男子学生は笑顔で去っていった。その間、何度も再考しようと考えを巡らせるも、上手く頭が回らなかった。

問題整理は何度もした。状況整理は幾らでもやった。だが、次への考えが進まない。既に出た話を何回もループさせて、整理だけが取り柄となった。

藍咲は何も言わず見ているだけで、特に突っ込んだりはしてこなかった。

しかし、突如声を上げた。

「ん、あの子」

腑抜けた声と目線の先には、これまた金髪の学生が居た。女子学生だった。

「……誰だ？」

当たり前だが、見たことは無い。今日はガイダンスのために集まっただけで、授業すら始まっていないのだ。

なら、余程の有名人か、藍咲の知り合いかな。

「途中で入ってきた子」

「なに？」

ある意味、有名人で当たりだったようだ。

最初から諦めていたが、まさか、出会えるとは。

「なあっ」

気が湛え、溢れ、声を掛けると、その子はこちらを振り返った。

「呼んだ？ 私のこと」

俺は、成る可く親しみやすそうに、笑顔を作って……

「ああ、呼んだ。俺は」

「……そんな経験、一度もない。」

「俺は、稗旗狐太郎だ」

だが、ここで逃してはいけない。

この人物だけは、絶対に。もはや最後の砦と言える。
「はあ？」

そして、最終兵器でもあるのだ。

突然な俺の自己紹介に、ぶっきらぼうだが答えてくれた。

「……。野木枯薄^{のぎこはく}だけど」

亡霊が現れたのは、野木と名乗ってくれた学生が入ったドアの反対側。
全員の視線が集まる中、その視線はどこを向いていた？

もしそうなら、この子は。野木枯薄は。

藍咲以外の、唯一の目撃証人な筈^{はず}なのだ。

「野木、一つ聞きたいことがある」

野木の反応から、あまり長話は出来そうにない。手短に、聞きたいことだけを。

少し意気込んだかもしれない。憚^{たんかく}赫とならぬよう、唾を飲み抑える。

「何だよ」

有難いことに、機嫌は悪そうだが、答えてはくれている。

「お前は、遅れて教室に入ったか」

これは確認だ。一応の。

「ああ。行く気無かったんだけどな」

大変気怠^{けだる}そうに、声色にも棘が増えた。

だが、そんなことは配慮してやれない。

「なら、見てないか。ドアを入れて直線上に、その……」

言葉が詰まる。今更ながら、こんな真剣な表情で、焦慮^{しょうりょ}が滲む表情で、“亡霊を見たか”

と問うなど、滑稽^{こっけい}すぎやしないか。

聞くべき一言が言えず、固まっていると、木の葉が擦れる音すら聞こえなくなった。

風が止み、静寂が訪い、野木は、俺の詰言^{キツゲン}の想を読み取った。

「見たぞ」

「へ？」

間の抜けた声が出た。咳^{せわふ}き一つ。

「今、なんて」

「“見た”って言ったんだ。聞こえなかったか？」

俺は驚いた。……驚いたのだ。

だから、聞き返したのだ。

驚いた理由は、野木が亡霊を見ていたこと、ではない。……ではない、筈なのだ。

確信が持てないのは、俺自身、理由が分かっているからだ。野木が亡霊を見たことは、決して驚くべきことではない。見ていなくとも、驚くべきことじゃない。

ならば、俺が驚いた理由は？

勘違いかもしれない。俺が今、人生の中でも特異な時間を過ごしているが故の、エラーコードかもしれない。

だが何だ、ここにある違和感は。

……その答えは得られぬまま、この謎は、最後の段階へ進む。

「私が見た、あれは——」

野木が真相を述べる直前、どこからともなく、機械音が聞こえてきた。

それによって齎もたらされた唐突な意識の転換は、俺の脳神経を焼き切るようだった。

「これは……」

徐々に近づいてくる、聞き覚えのあるその音は。

モーター音。軽々しい音だが、確かにこれも、明らかな機械音だ。しかしどこで聞いたんだ。思い出せない。

だが、俺には、その時間さえ与えられず。完膚無きまでの推理の敗北を浴びせるように、機械音はその姿を現した。

——これは。こいつは……。

俺たちの頭上を、人の形をした垂れ幕を提さげた、一機のドローンが通り過ぎた。そして周回する。

俺はそいつを睨ねめ付つける。まるで役を終えたノンプレイヤーキャラクターのように、野木は反応を示さない。

一瞬だけ現れた亡霊。

庇かたどなんて関係ない。

機械音を伴って、人の姿を象かたどっていた。

なるほど。それは垂れ幕付きのドローンにでも当て嵌はまる。今日も飛んでいたというのに、意識の外に放っていた。

だが、もう一つ。唸り声は。

唸り声という情報があったからこそ、より面倒になったのだ。そいつが明かされない限り、俺は認めんぞ。

期待通りか、または反意はんいか。直ぐに状況は再現された。

『新入生諸君、ぜひドローン部へ！』

ドローンから鳴る、音質の悪い、ガラガラでボソボソとした音声、辛うじてだが聞き取れた。

これで、全ての謎は解決された、か。

馬鹿馬鹿しい。

こんなことなら――

「ああ、この音だ」

じつとドローンを見詰めていた藍咲が、呑氣のんきにそう呟つぶやいた。

「ふーん、ドローン部……部活かあ。私ね、サークル入ろうかなって思ってた」

亡霊の正体は明かされ、野木は気付けば帰っていった。

どうも、八四一教室に居た学生たちが、ドローンの操縦者だったらしい。何を目的としたのかは知らないが、ともあれ、ようやく事に片が付いた。

一連の情報は早いとこ洗い流して、気持ちを切り替える。そして藍咲に言ってる。

「ここ、サークル無いぞ」

「えっ」

初めて動揺が見て取れた。俺は口端くちはが上がる。

「いや、無いは言いすぎだな。三つ四つか」

「ええっ」

携帯を取り出し、サークル一覧を見せてやる。

「ほら」

「……世界の直角研究サークル、日本全国あーるあーる探検隊、ファスナー手直しサークル、蟻群ぎぐん

眺望班……何これ

「サークル」

「……。大学生って暇なんだね」

「嫌なら、部活に入ればいい」

「うーん、でもなあ、“サークル”って言葉の響きが良かったんだけど。無いならいつか」
見せてやったサークルが無いことにされているのは置いておいて、あくまでサークルに入
りたかったらしい。そんなに重要だろうか。別にネームバリューも何も無いだろうに。

まあ、いいか。そこは藍咲の自由だ。

これで俺も、羈束からは開放された。

「……さて、そろそろ帰るか」

一時間も無い出来事が、なんとも色濃いものだった。俺の人生に、真新しい色彩が加えら
れたようで……もう、こんなことは二度とごめんだな。

現場を後にするところ、再び風が吹き始めた。今度はどこか心地良い。

これは、まるで……春風のような――？ いや、それはきつと大袈裟だ。

頭を振る。

今日はもう終わったのだ。解^{ほど}けない纏^{まと}りも、もう手放せば良いだけだ。明日からは、きつと日常が戻ってくる。

叶うならば、藍咲と関わり合いになることも、無ければ良いなと願うばかりであった。

——そして今に至る。

「改めて確認するぞ」

「どうぞ」

「俺たちは、今日の一限目……社会学」の講義が、ここ五五二教室で行われると思っていた」

「はいはい」

「そして来てみたところ、後にも先にも誰も来ないまま」

「その通り」

「約四十分が経過した」

「参ったね、こりゃ」

ふざけるな。

あの日、たった一時間でどれだけ俺が参ったことか。静かに生きたいという願いすら、仏さんは聞き届けてくれないわけか。俺が仏さんを利用しようとしたのが悪かったのか？取り敢えず詰めてやろう。

「この教室だって言ったのは、お前だったな」

俺は携帯を取り出し、藍咲からのメッセージ履歴を見せる。

『明日の一限目、SS2だつてさー』

『そうなのか。助かった』

「信じた俺が馬鹿だった」

自分で自分が恥ずかしい。調べなかった俺も悪いが。

顔を覆いたくなる気分の中、

「私は——」

藍咲も同じように携帯を取って、

「枯薄ちゃんに聞いたよ」

メッセージアプリを見せてきた。

そこには、

『明日の一限の講義は、SS2教室でやるつてさ。あのひえなんとかにも言つてやれ』
『おっけー』

と、あった。

「……あいつが犯人か」

この状況を作り出した張本人は、もう見つかった。

だが、あいつがそう言ったのだとしたら。

「なら、なんで野木はここに来ていない」

「さあ？」

藍咲は手振りと一緒に返事する。

俺を嵌めたかったのか？ 藍咲も巻き添えじゃないか。可哀想、なんて思わない。それよりも。

「まあいい、今の状況は解決された。質問に答えてくれるな」

どうしてこの大学に来たんだ——と。実は言うほど気になってはいないが、聞くだけ聞く。ここまで来たら後には引けない。

「勝手に解決したが、約束は果たしてもらおうか」

「約束？ “気が向いたらね” って言っただけだよ」

そう言うと思った。

「分かった、もういい」

だから、断られたらそれまでとして、詮索は止めようと思っていた。

そんな俺の態度に、つまらなそうにした藍咲が口を尖らせた。天邪鬼なやつめ。

「仕方ないな、じゃあちよつとだけ——」

狙ったように、藍咲の携帯が鳴った。

メッセージだ。それも、野木枯薄から。

単調なバイブレーションから、雄渾な文面が綴られていく。

『よお、今これを見るのは、藍咲か？ ひえなんとかか？』

どっちも見ているが、特にひえなんとかだ。

返信はしていない。

『ひえなんとかだろうな。ほんとに騙されるとは、笑える』

笑わないでほしい。真面目に恥ずかしく思ったのだ。

『あの日も、風船に騙されたんだって？ 滑稽だな』

ついに言われてしまった。それだけは言われたくなかったのに。むっとして、返信してやろうと思いついた途端。

ちようしょう

嘲笑もそこそこに、文調が変わった。

『私があそこに居なければ、お前は一体どうしていた』

『私が亡霊を見ていなければ』

『あの時ドローンが飛んで来なければ』

『お前はどうか、決着を付けるつもりだった』

急に、俺への疑問が並べられる。但しそれらの答えは持ち合わせていない。

というより、いきなり、何なんだ。

『何を正解として、何を示すつもりだった』

異様な、一方的なやり取りが、どうして当然のように進んでいる。

『こじつけのような答えを提示して、考えを放棄して、それ以前の問題かもしれない』

何故、そんなことを聞く？

俺に何を求めている？

何も、分からない。

『どうだ、言いたいことはあるか』

俺は既に、羈束から開放された筈だ。

野木枯薄、掌大の端末で、その画面の向こうから、お前は何が言いたい？

『答えは浮かばないか。そうだろうな、だからこそだ』
具体的に言え。

このやり方で、俺をどうしたいんだ。

『お前は何も出来なかった。ほんの小さな一歩さえ、お前は踏み出せなかった』
どうして嘘の場所を教えた。

何を聞きたくて疑問を述べた。

『それが私からの、お前への答えだ』

この教室に集めた目的は何だ。

俺はただ、巻き込まれただけなんだ。なのに、そこに何か、潜んでいても言うつもりか？

お前の真意は、何処にある？

携帯を手に取りそうになる。しかし制止するように、藍咲が言う。

「良く喋るね」

目線すら合っていない。なのに、これは牽制だと分かる。

藍咲の言葉が届いた筈がない。しかし少しの間を置いてから、メッセージが打たれる。
そして、一連の事件は幕を引く。

『嘘の教室を教えた理由。これは、亡霊の真実を導けなかった罰だ。噛み締めておけ』

……は？

『講義の心配はいい。今日は初回授業だったから、内容には入っていない。大事そうなのは、後で写真で送っというてやる。感謝しろ』

待て、答えを導けなかった、だと？

あの結果以上に、何があると言うんだ。

『あと、最早言っても無駄だろうが』

音声付きのドローンが、人型の垂れ幕を提げて通りがかった。それが真実じゃないか。
それにその答えだって、お前と藍咲が認めたものだったじゃないか。

『全て顧みる。それがお前の脆弱性だ』

文字はもう、目に入らない。

亡霊の真実だと？ そんなもの、どうやって。

……いや、考える必要はないか。事件はもう、随分前に解かれている。何を言われようが、これは時効だ。

『狐疑の夢など、所詮亡霊に過ぎない』

諦念は、悔しさの反転じゃない。

ましてや諦念でならない。

なんせ、俺は探偵なんかじゃない。

携帯が鳴る。少し間があった。

『ほらよ、これで最後だ』

写真だ。これを探して時間が空いたのか。

「……なんだ、これ」

意味が分からず、呟く。

藍咲は何も語らない。表情にも映らない。その奥は、やはり俺には読み取れない。

亡霊は亡霊らしく、野木枯薄の独白と共に、その姿は霞と消えた。かすみ

亡霊とは、存在しないからこそ亡霊なのである。

亡霊を見るなど、元より不可能だったのだ。

送られてきた一枚の写真には、制服姿の野木と私服の藍咲が、二人で共に写っていた。

俺の推理は、結局、どこまでも外れていたのだ。

……この場には何一つ、真実など在那里はしなかったのだ。